

地域でのつながりが高齢者の時間的展望に及ぼす効果 — 寺の行事への参加は望ましい時間的展望をもたらすか —

The Effects of Community Relations on Time Perspective Among Older Adults in Japan: Does Participation in Programs of Buddhist Temples have a Positive Effect on Time Perspective?

大橋 明¹⁾・安部幸志²⁾・大井智香子³⁾
Akira OHASHI, Koji ABE, and Chikako OHI

抄録:「寺」という場への参加が高齢者の時間的展望に効果をもたらすか否か検討した。岐阜県本巣市の老人クラブに所属する65歳以上の高齢者1,885名を対象として質問紙調査を実施した。年齢、性別、学歴、世帯構成、配偶者の有無、町内活動・自治体活動、バーセル指数を共変量とした傾向スコアマッチングを行ったところ、法会など寺の行事に参加している高齢者、墓掃除程度で参加している高齢者・参加しない高齢者がそれぞれ649名となった。その上で、寺の行事への参加の有無を独立変数、過去・現在・未来の時間的展望得点を従属変数としたt検定を行ったところ、法会という寺の行事に参加している高齢者は参加していない高齢者よりも過去を肯定的に捉えていた。一方、現在・未来の時間的展望に関しては両者に有意差はみられなかった。過疎化や高齢化が進行する中、宗教性だけでなく「従来からの社会的なつながりの場」という視点からも寺を再評価すべきことが示唆された。

キーワード：時間的展望、高齢者、寺の行事、地域のつながり

人とのつながりは中高年者が生きていく上で重要な要因となることは多くの研究で指摘されてきた。例えば金子・本橋・山路(2006)、Kaneko, Motohashi, Sasaki, & Yamaji(2007)は、互助と信頼、社会の責任感、帰属意識、インフォーマルなつながり、地域の優しさという観点でソーシャル・キャピタルを捉えた上で、秋田県の高齢者を対象として健康調査を行った。その結果、これらソーシャル・キャピタルの側面の低さをはじめ、加齢、友人仲間がいないことや家族への苛立ち、常に孤独であることが抑うつと関連があることを報告している。また本田ら(2010)によると、集会所で行われる町内会・自治会、老人クラブ、趣味の会など自主活動へ年6回以上参加している高齢者は、そうでない高齢者よりも1年後の抑うつ傾向や健康の自己評価、活動能力の低下が抑制されていた。加えて、Kawachi, Kennedy, & Glass(1999)は、年齢や性別、人種、収入などに関する変数を調整した上でソーシャル・キャピタルが身体的に影響するかを検討したところ、信頼感が低い者、社会相互関係が弱い者、集団への帰属意識が低い者は、そうでない者と比して身体的健康が有意に低いことを指摘した。

従来、地域には岐阜県の結(大井, 2005)、タノモシ講、山梨県などの無尽(米山, 2014)、徳島県での朋輩組(岡,

2012)、沖縄の模合(辻本・國吉・與久田, 2007)という互助活動が存在し、それなりに人間関係が維持されてきたとされる。しかしながら、人口の減少や地域活動への関心が低下したことによって、近所の人との親しい付き合いがあるとする人の割合も年々減少する(内閣府政策統括官, 2015)など、つながりをもつコミュニティ維持が困難になりつつある(内閣府, 2015)。

この地域に存在する社会的つながりを保持してきた場所のひとつとして寺社(寺や神社)もあった。昨今では、核家族化による世帯増大や常用労働者の増大が、家とつながっていた寺社に対する無関心・傍観をもたらした(森岡, 1970)こともあり、寺社と地域住民との関わりが減少している(石井, 2007; 金谷, 2013)。

寺社には「宗教」が伴う。広辞苑第六版(新村, 2008)によると、この宗教とは「神または何らかの超越的絶対者、あるいは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事。また、それらの連関的体系」である。宗教関連施設を訪れるということには、自分の至らなさや欠点に気づき、苦悩や問題の解決を願うという働きもあり(中尾, 2013)、また他者が救われるように祈る(Krause, 2003a)、人生の意味を得る(Krause, 2003b)のために赴くということもある。

1) 人間福祉学部人間福祉学科 2) 関西国際大学大学院人間行動学研究所 3) 短期大学部社会福祉学科

日本では「無宗教」という立場が強調される。しかし本人が信仰していないつもりでも、宗教から派生したり発達の中で内的に発生した宗教的な感情や理解的枠組みに基づいたりする知識や信念、態度、行動、すなわち宗教性があることを考慮すべきという論もある(荒川, 2016; 松島, 2016)。つまり特定の宗教を信仰しているか否かだけでなく、受験前に神殿に合格の願いに行く、道端の地蔵に首を垂れるという行動や、大晦日の晩に除夜の鐘を聞き1年の終わりを感ずる、ある人の命日に遠く離れたところから思いを馳せるという日頃の何気ない態度なども検討すべきという考え方である。実際、75.4%が宗教を信じていないとしながらも、普段神社や寺・教会などに行くとした者が80.7%を占めており(読売新聞, 2005)、その3年後でも概ね同様の結果が示されている(読売新聞, 2008)。これらに沿うと、日本人は特定の宗教を信仰してはいないが、宗教性は携えており、それを寺社や教会という場で表現していると言える。

特定の宗教から離れつつある現状ではあるが、寺社などには宗教性を体感し表出する場としての役割しかないのだろうか。滋野井(2013)や吉川(2009)は、寺社には相談あるいは対話の場という役割が保持されていることを示唆している。またLevin(2004)は、会衆と共に祈るという行為によって他者との結びつきを強く感じさせる機会が教会では提供されていることを指摘している。加えて過疎地域の寺院を通して事例研究を行った星野(2014)は、月に一度の寺の集まりに参集し、経を唱え、飲食を共にすることを通して、互いの関係性を強めていることを示している。Veenstra(2000)も礼拝への参加や同好の集まりに参加することが健康と関連していることを示唆している。

その他にも、鈴木・藤井(2008)は、寺社が複数存在する地域の場合、その地域に触れる回数が増えるほど地域への愛着が増大することを指摘する。この愛着は単に地域と関わるから生じるというよりは、むしろ寺社がその地域における古くからの記憶を宿し、かつ宗教性を湛える「風土の象徴的存在」であるためとしている。

以上のように寺社などにはさまざまな意味合いがあるが、高齢者を対象とした研究によると、個人的に祈る、宗教的活動への参加、礼拝・参拝という宗教的な行動が中年や若年より多い(高橋・井出, 2004)という。また女性の方が宗教的意識や行動が多い(木村, 2003; NHK 世論調査部, 1984)という性差はあるものの、信仰率は年齢と共に増大する(金児, 1998; 木村, 2003)。そして宗教的活動を通して、高齢者は抑うつから守られ(Norton et al., 2008)、宗教から人生の意味を得た高齢者は人生満足感や自尊感情、楽観的視点を持っている(Krause, 2003b)ことが報告されている。

これらのことから、寺など旧来から存在する場が、高齢者をはじめとする地域住民の他者と交わる場としての意味ももち、それが参加者に心身の健康や主観的幸福

感などに影響を与えていることが推測できるが、この主観的幸福感の構成要素に時間的展望がある(Diener, Shu, Lucas, & Smith, 1999)。時間的展望とはLewin(1942/1997)が述べるように、過去、現在および未来に対する態度や感情を指す。Erikson, Erikson, & Kivnick(1986)によると、高齢者が該当する人生の第8段階において、絶望を感じさせる要因である、過去が違うものであったらという思いや痛みの伴う現在、はっきりせず恐ろしい未来、逃れられない死というものを認めようと努力することが求められる。また、第9段階ではこの絶望がいつも連れ添うようになる(Erikson & Erikson, 1997)。加えて、高齢者が幸福感を感じる上で、感情的に安定していることや自分の人生を肯定的に評価できることが重要である(岡林, 2007)など、高齢者において時間的展望は大きな意味をもつ。

このような時間的展望はさまざまな要因と関連していることが指摘されている。例えば加齢とともに未来への展望は狭くなり(池内・長田, 2015; Windsor, Fiori, & Crisp, 2011)、未来に対する評価も低下する(山口, 1996)という結果が報告されている。また、男性が女性より過去と現在の評価が高い(下仲・村瀬, 1976)、女性の方が現在に満足感をもっている(原田, 2002)という相反する結果も示されている。加えて教育年数が低いほど抑うつ高齢者が多く(吉井, 2007)、独居または配偶者と一緒に生活していない人は現在の幸福感が低い(Simons, Peeters, Janssens, Lataster, & Jacobs, 2016)、社会活動や社会的な相互作用が主観的幸福感に大きく影響する(Larson, 1978)ことなども挙げられている。Lowry(1984)は、過去の時間的展望は健康状態と加齢、現在の時間的展望は健康とボランティア仲間がいること、未来への時間的展望は健康と関連があることを報告している。白井(1997)も、過去受容は近所の友人数、健康、暮らし向き、収入、学歴と、現在の充実感、近所の友人数、健康、暮らし向きと、未来への希望は近所の友人数、暮らし向き、学歴と相関があるとしている。

このように、時間的展望にはさまざまな要因が関連することが指摘されているが、その要因は寺の行事への参加とも関連していることから、要因の交絡が推測される。そこで本研究では、他者とのつながりという視点から、従来大きな意味を持っていた「寺」という場での交流を取り上げ、傾向スコアマッチングを採用して他の要因の影響を取り除いた上で、「寺」という場が主観的幸福感と深い関わりのある時間的展望に実質的な効果をもたらすか否か検討した。

方 法

対 象 者

対象者は岐阜県本巣市に在住し老人クラブに所属する65歳以上の高齢者4,278名である。調査方法は留め置き

法を採用し、市内全51の老人クラブ会長宛に調査用紙配布を依頼し、返信は郵送にて行った。調査時に対象者に対し、調査への参加に同意が得られた場合のみ回答するように求めた。死亡、入院などによる172名を除く4,106名に質問紙が配布され3,054通が回収された(回収率74.4%)。そのうち回答に不備の認められなかった1,885名を傾向スコアマッチングの分析対象とした(表1)。

対象者全体の平均年齢は76.51 ($SD=7.02$) 歳であった。男性は837名で平均年齢は75.87 ($SD=6.37$) 歳、年齢幅は65~95歳、女性は1,048名、平均年齢は77.02 ($SD=7.46$) 歳、年齢幅は65~107歳であった。

表1 対象者の基本属性

	男性 ($n=837$)	女性 ($n=1,048$)	合計 ($n=1,885$)
	n (%) or M (SD)	n (%) or M (SD)	n (%) or M (SD)
年代別			
74歳以下	392 (46.8)	446 (42.6)	838 (44.5)
75~84歳	354 (42.3)	413 (39.4)	767 (40.7)
85歳以上	91 (10.9)	189 (18.0)	280 (14.9)
学歴			
中学校	403 (48.1)	620 (59.2)	1,023 (54.3)
高等学校以上	434 (51.9)	428 (40.8)	862 (45.7)
世帯構成			
一人暮らし	56 (6.7)	138 (13.2)	194 (10.3)
夫婦世帯	267 (31.9)	190 (18.1)	457 (24.2)
二世帯以上	514 (61.4)	720 (68.7)	1,234 (65.5)
配偶者の有無			
同居	743 (88.8)	562 (53.6)	1,305 (69.2)
離別	11 (1.3)	30 (2.9)	41 (2.2)
死別	82 (9.8)	450 (42.9)	532 (28.2)
未婚	1 (0.1)	6 (0.6)	7 (0.4)
町内・自治体活動			
積極的に参加	494 (59.0)	479 (45.7)	973 (51.6)
積極的ではない	219 (26.2)	305 (29.2)	525 (27.9)
参加していない	124 (14.8)	263 (25.1)	387 (20.5)
寺の行事			
参加(法会など)	435 (52.0)	528 (50.4)	963 (51.1)
参加(墓掃除程度)	179 (21.4)	202 (19.3)	381 (20.2)
参加していない	223 (26.6)	318 (30.3)	541 (28.7)
パーセル指数	96.51 (11.36)	93.99 (16.65)	95.11 (14.59)

変数

(1) 寺の行事への参加の有無

本研究の対象者は老人クラブ参加者であるため、「老人クラブやその他の団体への参加状況についてお尋ねします」と問い、「お寺の行事」に参加しているかどうかについて、「参加している(法会などの行事)」「参加している(墓掃除程度)」「参加していない」の3つのうちひとつを選択させた。

対象者の居住地である本巢市で登録されている宗教法人数は、神社神道系が129と多く、仏教では浄土系の43、

禅系の27、真言系の7、日蓮系の1である(岐阜県総合企画部統計課, 2012)。宗教を信仰している日本人は39%であり、そのうち信仰する宗教の割合は仏教が34%、神道が3%である(西, 2009)。戦後は氏神の存在意義が希薄化し続けている(金谷, 2013)というが、岐阜県(1973)によると、1962年実施の調査結果では、宗教を信じると回答した者が全体の62.6%であり、その中で仏教を挙げた50歳以上が85.5%、現在高齢者の段階にあると思われる当時20歳台の者でも69.9%が仏教を挙げ、神道は19.2%であった。また本対象者の居住地である本巢市は西濃地域に分類されるが、宗教を信じると回答した者のうちの82.8%が仏教、12.0%が神道を挙げていた。加えて宗教を信じないとした当時20歳台の人のうち、宗教的な心は大切とした者が55.7%いた。併せて本巢市の一部を構成する本巢町(1975)は、1965年に行われた全日本仏教徒大会が岐阜で開催されたことを機に、檀信徒会が各寺院を中心に結成され、地味ではあるが活動を続けていることを報告している。

以上からも、当地域で仏教が主要な宗教として扱われていたことが推測されるため、今回は寺に特化した。

(2) 時間的展望

過去および現在の時間的展望はErikson et al. (1986)の理論に依拠し5件法2項目で回答を求めた。過去の2項目は「自分のこれまでの人生はこれでよかったと思える」「自分のこれまでの人生が、もっと別のものであればよかったのと思う」、現在の2項目は「今の生活に満たされていない」「今の自分の生活に満足している」である。未来に関してはLang & Carstensen (2002)の5件法5項目を採用した。いずれの項目も「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」という5件法(1~5点)で回答させた。得点が高いほどポジティブな展望であることを意味する。

(3) その他の基本属性

基本属性として、年齢、性別、学歴、世帯構成(同居者の有無)、配偶者の有無、町内活動・自治体活動(以下、町内・自治体活動)への参加の有無、パーセル指数について回答を得た。世帯構成については「息子(娘)夫婦や孫と同居・隣居、結婚していない息子(娘)と同居」「自分たちだけの夫婦世帯」「一人暮らし」の3つから、配偶者の有無については「一緒に暮らしている」(同居)、「生き別れた」(離別)、「死に別れた」(死別)、「結婚したことがない」(未婚)の4項目からそれぞれひとつを選択させた。また町内・自治体活動への参加の有無については、寺の行事への参加と同じ教示をした上で、「積極的に参加している」「あまり積極的ではない」「参加していない」からひとつ回答させた。パーセル指数は10項目からなるMahoney & Barthel (1965)が作成した自立

度を測定する指標であり、今回は健康状態を見るために採用した。採点法に従い100点～0点で換算した。

分析方法

本研究では、「寺の行事への参加」という観点で時間の展望の差異を捉えるが、さまざまな要因が交絡していることが推察できるため、傾向スコアによるマッチングを採用した。すなわち、独立変数である「寺の行事への参加」および従属変数である「時間的展望得点」に影響を与えらると思われる複数の変数を1つの変数に集約し、寺の行事の参加している者としていない者という独立変数の背景が一致するよう無作為に割り付けされた対象者を用いた。その手法については、星野(2009)や星野・岡田(2006)、河合・猪俣・大塚・杉山・平野・大淵(2016)に従った。また折笠(2015)に従い、マッチングの許容範囲を±0.05とした。解析には、IBM SPSS 22.0J for Windowsを用いた。

倫理的配慮

本研究を実施する上で、中部学院大学研究倫理委員会の承認を得た(E11-0009)。なお対象者には、調査の趣旨、調査協力の任意性、匿名性の担保を記載した依頼状を調査用紙に添付した。参加に同意する者のみ回答するよう求め、記入した調査用紙の返信をもって調査協力を同意したとみなした。

結 果

1. 基本属性

本研究の全体的な対象者数である1,885名について、性別による偏りを確認したところ、年代別では85歳以上が女性で多く($\chi^2(2) = 18.94, p < .001, V = .30$)、平均年齢も女性の方が有意に高かった($t(1874.65) = 3.59, p < .001, d = .17$)。学歴は高等学校以上が男性で有意に多くみられた($\chi^2(1) = 22.74, p < .001, w = .11$)。世帯構成は、二世帯以上の同居と一人暮らしはそれぞれ女性で、夫婦世帯は男性で有意に多かった($\chi^2(2) = 59.15, p < .001, V = .18$)。配偶者の有無については、離別、死別、未婚を一群としてまとめ配偶者と比較したところ、有配偶者は男性で多くみられた($\chi^2(1) = 269.80, p < .001, w = .38$)。町内・自治体活動への参加についても、積極的に参加しているのは女性で、男性では参加していない者が有意に多かった($\chi^2(2) = 41.48, p < .001, V = .15$)。

寺の行事への参加については、「法会などの行事に参加」しているという回答が対象者の51.1%でみられた一方、「参加していない」者も28.7%存在した。「法会などの行事に参加」を「寺の行事に参加」、「墓掃除程度に参加」「参加していない」を「寺の行事に参加」「参加していない」を「寺の行事に参加」としてまとめ比較したところ、性による偏りはみられなかった。

バーセル指数は男性の方が有意に高かった($t(1840.37) = 3.90, p < .001, d = .18$)。

2. 寺の行事への参加の有無でみた基本属性と傾向スコアマッチング後の基本属性

寺の行事への参加の有無でみた基本属性を表2に示した。その結果、平均年齢は参加者の方が有意に高かった($t(1771.58) = 4.62, p < .001, d = .21$)。学歴は高等学校以上が参加者で有意に多く($\chi^2(1) = 17.81, p < .001, w = .10$)。有配偶者で参加する者が多くみられた($\chi^2(1) = 7.43, p < .01, w = .01$)。町内・自治体活動への参加については、「積極的に参加している」とした者は法会に参加しているという回答が多く、「積極的でない」「参加していない」とする者は寺の行事に不参加とする者が多かった($\chi^2(2) = 173.07, p < .001, V = .30$)。世帯構成では有意な偏りはみられなかった。加えて、バーセル指数は参加者の方で有意に高かった($t(1045.77) = 10.23, p < .001, d = .48$)。世帯構成では有意な偏りは認められなかった。

表2 寺の行事への参加でみた基本属性

	行事に参加 (n = 963)	行事に参加 (n = 922)	χ^2 値 or t値 (effect size)
	n (%) or M (SD)	n (%) or M (SD)	
年齢	75.78 (6.23)	77.27 (7.69)	4.62 *** (d = .21)
性別			.47 ns (w = .02)
男性	435 (45.2)	402 (43.6)	
女性	528 (54.8)	520 (56.4)	
学歴			17.81 *** (w = .10)
中学校	477 (49.5)	546 (59.2)	
高等学校以上	486 (50.5)	376 (40.8)	
世帯構成			.08 ns (V = .06)
一人暮らし	99 (10.3)	95 (10.3)	
夫婦世帯	231 (24.0)	226 (24.5)	
二世帯以上	633 (65.7)	601 (65.2)	
配偶者の有無			7.43 ^{a)} ** (w = .01)
同居	694 (72.1)	611 (66.3)	
離別	17 (1.8)	24 (2.6)	
死別	251 (26.1)	281 (30.5)	
未婚	1 (0.1)	6 (0.7)	
町内・自治体活動			173.07 ^{b)} *** (V = .30)
積極的に参加	624 (64.8)	349 (37.9)	
積極的ではない	240 (24.9)	285 (30.9)	
参加していない	99 (10.3)	288 (31.2)	
バーセル指数	98.44 (5.22)	91.63 (19.58)	10.23 *** (d = .48)

***p < .001 **p < .01

a) 配偶者あり(同居)と配偶者なし(離別・死別・未婚)で分析した

b) 積極参加: 参加 > 不参加、
積極的でない: 参加していない: 不参加 > 参加

各変数間の相関係数を表3に示した。世帯構成は二世帯以上の同居、夫婦世帯で、それぞれ一人暮らしを基準

表3 各変数の相関係数 (ρ)

	過去 展望 ^{a)}	現在 展望 ^{a)}	未来 展望 ^{a)}	性別 ^{b)}	年齢 ^{c)}	学歴 ^{d)}	世帯構成		配偶者の 有無 ^{f)}	バーセル 指数 ^{g)}	町内・ 自治体 活動 ^{h)}
							同居 ^{e)}	夫婦 ^{e)}			
寺行事参加 ⁱ⁾	.126 ***	.066 **	.144 ***	-.016	-.080 **	.097 ***	.006	-.006	.063 **	.197 ***	.270 ***
過去展望 ^{a)}	—	.530 ***	.218 ***	-.029	.040 †	.083 ***	.021	.033	.031	.117 ***	.151 ***
現在展望 ^{a)}		—	.180 ***	.010	.010	.039 †	.022	.003	.005	.137 ***	.143 ***
未来展望 ^{a)}			—	.003	-.269 ***	.051 *	-.021	.072 **	.148 ***	.243 ***	.270 ***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

- a) 得点が高いほど肯定的である、また過去展望・現在展望・未来展望は各時制の時間的展望得点を示す
- b) 男性を1、女性を2と設定した c) 満年齢 d) 中学校を1、高等学校以上を2と設定した
- e) 一人暮らしを0としたダミー変数を設定した f) 配偶者あり(同居)を2、配偶者なし(離別・死別・未婚)を1と設定した
- g) 得点が高いほど自立度が高いことを示す h) 「積極的に参加する」を2、「あまり積極的でない」および「参加しない」を1と設定した
- i) 「(法会など)寺の行事に積極的に参加する」を2、「(墓掃除程度で)積極的に参加しない」および「参加しない」を1と設定した

値とした変数を設定した。また町内・自治体活動についても、「積極的に参加」と「積極的ではない」「参加していない」の2条件にして分析を行った。その結果、寺の行事への参加の有無は町内・自治体活動への参加の有無と弱い正の相関がみられた ($\rho = .270, p < .001$)。過去の時間的展望得点は、現在の時間的展望得点と中程度の正の相関 ($\rho = .530, p < .001$)、未来の時間的展望得点と弱い正の相関がみられた ($\rho = .218, p < .001$)。また未来の時間的展望得点は年齢と弱い負の相関 ($\rho = -.269, p < .001$)、バーセル指数、町内・自治体活動の参加とそれぞれ弱い正の相関がみられた (バーセル指数: $\rho = .243, p < .001$; 町内・自治体活動, $\rho = .270, p < .001$)。

因果関係の向きについて考慮し、性別、年齢、学歴、世帯構成2変数(二世帯以上の同居、夫婦世帯で、それぞれ一人暮らしを基準値とした)、配偶者の有無(2条件)、町内・自治体活動への参加の有無(2条件)の8変数を寺の行事への参加の有無の共変量として傾向スコアを推定し、マッチングを行った。その結果、寺の行事に参加、寺の行事に不参加に分類された者はそれぞれ649名、計1,298名となった。寺の行事への参加の有無によって共変量に差異がないか確認するため、 χ^2 検定およびt検定を行ったところ、表4に示した通り有意な偏りや有意な平均値の差は認められなかった。

表5に寺の行事への参加の有無と各時間的展望得点の共変量として、傾向スコアの算出に使用した項目の回帰係数、オッズ比などを示した。最終的に性別、世帯構成、配偶者の有無では有意なオッズ比は認められなかった。算出された傾向スコアの平均値は0.53($SD=0.13$)であり、最小値は0.02、最大値は0.77であった。モデルの適合度をみると、 χ^2 値が239.78であり($p < .001$)、Negalkerkeの R^2 値が0.159、HosmerとLemeshowの検定では χ^2 値が5.29($p = .727$)と、モデルの有意性、適合度がそれぞれ適切であることが示された。判別率的中率は63.9%であった。

表4 寺の行事への参加でみた傾向スコアマッチング後の基本属性 ($n=1,298$)

	行事に参加 ($n = 649$)		行事に不参加 ($n = 649$)		χ^2 値 or t 値 (effect size)
	n (%) or M (SD)	n (%) or M (SD)	n (%) or M (SD)	n (%) or M (SD)	
年齢	75.49 (6.75)	75.86 (6.45)			1.01 <i>ns</i> ($d = .06$)
性別					.05 <i>ns</i> ($w = .01$)
男性	209 (44.7)	294 (45.3)			
女性	359 (55.3)	355 (54.7)			
学歴					.15 <i>ns</i> ($w = .01$)
中学校	359 (55.3)	352 (54.2)			
高等学校以上	290 (44.7)	297 (45.8)			
世帯構成					.17 <i>ns</i> ($V = .01$)
一人暮らし	409 (63.0)	402 (61.9)			
夫婦世帯	169 (26.0)	175 (27.0)			
二世帯以上	71 (10.9)	72 (11.1)			
配偶者の有無					1.62 ^{a)} <i>ns</i> ($w = .04$)
同居	444 (68.4)	465 (71.6)			
離別	12 (1.8)	17 (2.6)			
死別	192 (29.6)	164 (25.3)			
未婚	1 (0.2)	3 (0.5)			
町内・自治体活動					.00 ^{b)} <i>ns</i> ($w = .00$)
積極的に参加	342 (52.7)	342 (52.7)			
積極的ではない	219 (33.7)	185 (28.5)			
参加していない	88 (13.6)	122 (18.8)			
バーセル指数	98.15 (6.28)	98.04 (5.74)			.35 <i>ns</i> ($d = .02$)

- a) 配偶者あり(同居)と配偶者なし(離別・死別・未婚)で分析した
- b) 「積極的ではない」「参加していない」を一群としてまとめて分析した

3. 寺の行事への参加の有無と時間的展望得点

分析対象者の背景を揃えた上で、寺の行事への参加の有無を独立変数、各時間的展望得点を従属変数としたt検定を行った。表6にはマッチング前の平均値およびt値、マッチング後の平均値およびt値を併記した。

その結果、過去の時間的展望得点では弱い効果量であるものの有意差が認められ ($t(1296) = 2.77, p < .01, d = .15$)、寺の行事に参加している者は、墓参り程度の人や参加していない者よりも過去展望が肯定的であっ

表5 「寺の行事への参加の有無」と各時間的展望得点の共変量として傾向スコアの推定に使用した項目 (n=1,298)

	回帰係数 (B)	標準誤差 (SE)	Wald統計量 (SE/B) ²	自由度	有意確率 (p)	オッズ比 (OR)	95%信頼区間 (CI値)
性別	-.17	.11	2.40	1	.121	.85	0.69-1.05
年齢	.02	.01	7.97	1	.005	1.03	1.01-1.04
学歴	-.36	.10	12.33	1	.000	.70	0.57-0.85
世帯構成							
二世帯以上(対一人暮らし)	-.09	.18	.25	1	.619	.91	0.64-1.31
夫婦世帯(対一人暮らし)	.21	.21	.95	1	.330	1.23	0.81-1.87
配偶者の有無	-.10	.14	.45	1	.502	.91	0.69-1.20
バーセル指数	.05	.01	45.19	1	.000	1.05	1.04-1.07
町内・自治体活動	-.96	.10	85.42	1	.000	.00	0.31-0.47

モデル適合度: $\chi^2 = 239.78$ ($p < .001$), Nagkerkeの $R^2 = 0.159$, HosmerとLemeshowの検定: $\chi^2 = 5.29$ ($p = .772$), 判別率: 63.9%

表6 寺の行事への参加の有無でみた時間的展望得点と傾向スコアマッチング後の時間的展望得点

	<対象者全体>				<傾向スコアマッチング後>			
	行事に参加 (n = 963)	行事に不参加 (n = 922)	t値	effect size (d)	行事に参加 (n = 649)	行事に不参加 (n = 649)	t値	effect size (d)
	M (SD)	M (SD)			M (SD)	M (SD)		
過去展望 ^{a)}	7.60 (1.94)	7.09 (2.05)	5.57 ***	.26	7.50 (1.98)	7.19 (2.05)	2.77 **	.15
現在展望 ^{a)}	7.40 (1.81)	7.12 (1.74)	3.41 **	.16	7.33 (1.80)	7.31 (1.70)	.19 ns	.01
未来展望 ^{a)}	13.84 (3.21)	12.88 (3.51)	6.20 ***	.29	13.62 (3.29)	13.42 (3.46)	1.09 ns	.06

*** $p < .001$ ** $p < .01$

a) 過去展望・現在展望・未来展望は各時制の時間的展望得点を示す

た。現在の時間的展望および未来の時間的展望では、両者に差は認められなかった。

考 察

1. 対象者の特徴

本研究の対象者は、配偶者と一緒に暮らしている者が70%弱であり、離別が2%、死別が30%弱、未婚は1%に満たなかった。男女別でみると、男性では有配偶者が89%、離別が1%強、死別が10%弱、未婚が0.3%、女性では有配偶者が55%、離別が2.5%、死別が40%強、未婚が1%弱であった。2010年の国勢調査(内閣府, 2012)によると、男性の場合は有配偶者が80.6%、離別が3.6%、死別が10.7%、未婚が3.6%であり、女性では有配偶者が48.4%、離別が4.6%、死別が40.7%、未婚が3.9%であった。このことから、全国の同時期の結果と比べると、本研究の対象者は有配偶者が比較的多く、離別・死別が比較的小さい傾向にあることが窺われる。配偶者がいる者は配偶者がいない者よりもうつ傾向が低いこと(末盛, 2007)、加えてバーセル指数の平均が95点台であることからほぼ完全に自立していたことも勘案すると、本研究の対象者は心身ともに比較的健康であったことが推測できる。

寺の行事への参加については、法会などの行事に参加しているとした者が51.1%であり、墓掃除程度が2割程度、参加していないとした者が3割程度であった。曹洞宗総務庁(2014)が行った檀信徒を対象とした調査によると、「寺社の行事や儀礼に参加している」とした者が51.7%であった。つまり、本菓市の結果は信仰する宗教と一般人よりもつながりが深いであろう檀信徒の調査結果とがほぼ同じであった。

宗教意識などについてまとめた石井(2007)は、2005年の時点で宗教が大事だと回答する者は町村在住の対象者のうちの42.6%を占めており、大都市や中核都市、中都市の30%台と比しても多いことを報告している。また、NHK世論調査部(1984)は小都市や町村の住民の方が大都市の住民よりも宗教活動や宗教意識が高いことを指摘している。その理由として、自然が人間の力を超えるような大きな力となって人間の前に現れた時に、人間は宗教的な意識を持ち宗教的行動をとること、すなわち町村では大自然に直接触れる機会が多いこと、また昔ながらの習慣が町村部では残りやすいこと、つまり檀家制度や氏子制度が残存していることをその理由として挙げている。他にも相澤(2016)は、檀徒が多い地域では高齢世帯が40%を超えていることを指摘している。

本菓市は2004年に本菓町、真正町、糸貫町、根尾村が

合併して市となったという背景があり、石井（2007）のいう町村に該当すると考えられるが、自然が豊かで共同体でのつながりが強く残る町村部に居住している者、さらには高齢者を対象としたことから、法会への参加率が高いという結果がもたらされたと考えられる。

2. 寺の行事への参加が及ぼす時間的展望への効果

先行研究や基本属性の値を踏まえ傾向スコアを算出し、背景のマッチングをした上で寺の行事への参加の有無が時間的展望に差異をもたらしているかを検討したところ、法会への参加者は過去に対して有意にポジティブに捉えていることが示された。

浄土系の寺では、報恩講、涅槃会、彼岸永代経、花祭り、お盆会など、年に何度も法会があり、加えて年4回の講師を招いての講話、毎週日曜朝には日曜学校が開かれる（法園山正尊寺, 2016）。また本巣市ではないが禅系の寺でも、大般若会、涅槃会、彼岸会、降誕会、山門施餓鬼などの法会や月1回の写経会が行われている（雲黄山大智寺, 2016）。これらの集まりは、釈迦や宗祖への追慕と報恩の意味もあるが、鬼籍に入った身内や先祖に思いを馳せる場、すなわち過去を振り返る場である。高齢者の回想について整理したButler（1968）は、回想は過去の経験の意識化をもたらし、未解決の葛藤を呼び起こす普遍的なプロセスであること、この葛藤は再検討され統合される可能性があることを指摘している。また回想は蓄積した業績や困難を超えてきた力を再認識する作業となる（Lewis & Butler, 1974）。

曹洞宗総務庁（2014）は菩提寺の行事への参加目的を複数回答で尋ねたところ、「供養したいから」が58.8%、「恒例の行事だから」が54.9%、「子孫のつとめだから」が41.8%、「心が安らぐから」が31.4%であった。福井県民を対象とした研究（金児, 1998）では、宗教行動として40歳台までは「欲望を満たしたい」といった現世利己的行動が強いが、50歳台以降は供養や感謝の念からなる慰霊的行動が現世利己的行動より大きくなることが報告されている。つまり、法会など寺の行事への参加を通して、自分と共に生きた人たちへ愛慕や懐古、感謝の思いを抱きつつ過去の振り返りがなされ、過去の自分と折り合いをつけるなど自らの人生を統合する取り組みがなされていることが考えられる。

しかし、墓掃除程度は参加するとした者や「参加していない」とした対象者は、慰霊的行動や意識が少ないのかというところではないと思われる。読売新聞（2005）によると、盆や彼岸にお墓参りに行くという者は79.1%、しばしば家の仏壇や神棚などに手をあわせるとした者は54.7%であった。この墓参りや仏壇に手を合わせるという行動には、故人や先祖を偲び見守ってもらう、感謝を伝える、故人と語り合うといった目的があることが報告されている（曹洞宗総務庁, 2014）。従って、法会など寺での行事に参加する者と、墓掃除程度とする参加者や寺

での行事に参加しない者の間で、供養したいなど慰霊の気持ちに差があるゆえに過去の時間的展望に大きな差が生じたと限定するのは早計かもしれない。

集団での回想・思い出話はその集団内交流を促す（野村・橋本, 2006）が、曹洞宗総務庁（2014）の調査では、「みんなが参加するから」ということを行事の参加理由とした回答が11.8%でみられた。つまり法会などへの参加を通して、慰霊的行動ができるということだけでなく、慰霊の思いを同じくする仲間との関係性が強まり（星野, 2014; Levin, 2004）、実存的・情動的支援を仲間の教区民から得ることができる（Krause, 2002）ことも、過去の時間的展望をより望ましいものにしたと考えられる。

過去の時間的展望とは異なり、寺の行事への参加は現在の時間的展望得点および未来の時間的展望得点に効果をもたらさなかった。つまり、寺の行事への参加は時間的展望には限定的な効果しかもたらさないことが示された。Lang & Carstensen（2002）によると、高齢者における未来の時間的展望は年齢と負の相関がある。またLowry（1984）は、健康状態やボランティア仲間がいることと現在の時間的展望との間に、健康状態や仕事を継続していることと未来の時間的展望との間に関連があることを指摘している。白井（1997）も近所の友人をはじめとするいくつかの背景が過去・現在・未来の時間的展望に関連していることを報告している。今回の研究では、年齢や性別、町内・自治体活動、自立度を示すバーセル指数などの影響をマッチングして分析を行ったが、そのことも現在や未来の時間的展望に差が見られなかったことにつながっていると思われる。

一方で、過去の時間的展望得点は現在の時間的展望得点の間に中程度の正の相関、未来の時間的展望得点との間には弱い正の相関を示した。Desmyter & Raedt（2012）は、65歳以上の高齢者149名を対象として、時間的展望と現在の感情や人生満足度との関係を検討している。その結果、良好な過去展望を持っている者は生活満足度が高くうつ感情が低かった。高齢者はさまざまな現在の問題に向き合う（Erikson et al., 1986）が、この現在の問題を解決しようとする過程において、過去に光を当てることで未来が開かれる（Freed, Kurokawa, & Kawai, 1993）。寺の行事への参加は過去の時間的展望にのみ影響を及ぼすのかもしれないが、そのことが現在や未来への時間的展望につながっていくことも推測される。

寺をめぐることは、高額のお布施や寄付を集めている（読売新聞, 2005）などといった負の側面が強調されている。一方で、僧侶が外へ出て本来の役割である「人の苦悩や悲嘆に向き合う」臨床宗教師としての活動がなされたり（森田, 2015; 島蘭, 2015）、葬儀と供養の意味をわかりやすく伝えようとする試みがなされたり（曹洞宗岐阜県青年会, 2016）と、宗教の本来の役割を果たそうという取り組みが昨今見られるようになってきた。加

えて、寺にはお供えが多くもたらされることから、経済的に困難な状況にある家庭へおすそわけをし、家庭と支援団体との関係構築に寄与しようとする「おてらおやつクラブ」も誕生している（一般社団法人お寺の未来, 2016）。これらには他者とのつながりという視点も伴う。過疎化や高齢化が進行する中、宗教性という視点だけではなく、「従来からの社会的つながりの場」という視点からも「寺」を再評価することが必要かもしれない。

3. 本研究の問題点と今後の課題

今回の研究では、「寺の行事への参加の有無」と表現し、「法会への参加、墓掃除程度、参加していない」という3段階で評定させた。しかしながら、神道をはじめキリスト教やイスラム教など仏教と関わりのない宗教では「法会」という表現を用いない。それゆえ仏教以外の宗教を信仰している者については捉えることができなかった。本研究では「寺」と限定したためにこの「法会」という表現を用いたが、神社や祭事を請け負う氏子制度というつながりも弱くなったとはいえ地域に存在する。対象者のより広範囲な社会的つながりとその影響をみるためには、より適切な表現を検討する必要がある。

また今回、寺の行事への参加を他者と関わる「場」として扱ったが、「法会への参加」という行動は祈りや宗教活動という宗教性の意味でも理解できることは否定できない。教示では「つながり」を意図した表現を用いたが、寺という場を他者とのつながりという意味で用いるためにも、質問の仕方などより吟味する必要もあろう。

分析については、今回傾向スコアマッチングを用い、共変量として年齢、性別、学歴、世帯構成、配偶者の有無、町内・自治体活動への参加の有無、バーセル指数を投入した。傾向スコア算出の際に、従属変数と関連があると思われる変数については、その選択には留意するとともに、なるべく多く投入することが重要であるとされる（星野, 2009）。また、共変量が従属変数や独立変数より先行するものを選択する、つまり共変量が従属変数の結果になってはならないともされる（星野・岡田, 2006）。町内・自治体活動への参加の有無は微妙な位置づけとなるであろうが、より注意深く変数を選択し、他者とのつながりの場の意義をさらに検討していく必要がある。

本研究は2011年度内閣府地域活性化交付金（住民生活に光をそそぐ交付金）事業として行ったものです（『高齢者のメンタルヘルス実態調査報告書——岐阜県本巣市の高齢者を対象として——』研究代表者：大橋明）。また日本老年社会学会第55回大会（2013）で発表したものを大幅に加筆・修正しました。本論文を作成するにあたり、岐阜県健康福祉部の林隆彦様、吉村隆子様、本巣市健康福祉部の片岡俊明様には多くのお力添えを賜りました。御礼申し上げます。

引用文献

- 相澤 秀生 (2016). 過疎地域における供養と菩提寺——曹洞宗—— 櫻井 義秀・川又 俊則 (編) 人口減少社会と寺院——ソーシャル・キャピタルの視座から—— (pp.181-214) 法蔵館
- 荒川 歩 (2016). 「信仰をもっていない」と答える人の信仰の世界 松島 公望・川島 大輔・西脇 良 (編). 宗教を心理学する——データから見えてくる日本人の宗教性—— (pp.163-178) 誠信書房
- Butler, R. N. (1968). The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 65-76.
- Desmyter, F., & Raedt, R. D. (2012). The relationship between time perspective and subjective well-being of older adults. *Psychologica Belgica*, 52, 19-38.
- Diener, E., Shu, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, 125, 276-302.
- Erikson, E. H., & Erikson, J. M. (1997). *The life cycle completed, extended version*. New York: W. W. Norton & Company.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton & Company.
- Freed, A. O., Kurokawa, Y., & Kawai, H. (1993). *The changing worlds of older women in Japan*. Xenia: Knowledge, Ideas & Trends.
- 岐阜県 (1973). 岐阜県史——通史編 現代—— 岐阜県岐阜県総合企画部統計課 (2012). 市郡別、宗派別宗教法人数 平成23年岐阜県統計書 Retrieved from <http://www.pref.gifu.lg.jp/kensei/tokei/tokei-joho/11111/tokeisyo-youran/gifuken-tokeisho/H23.data/21kyouikubunka.pdf> (2016年11月24日)
- 原田 一郎 (2002). 高齢者の時間的態度の特徴についての一考察——青年との比較から—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 49, 93-104.
- 法園山正尊寺 (2016). 平成28年正尊寺年間行事 Retrieved from <http://www.shosonji.or.jp/> (2016年11月24日)
- 本田 春彦・植木 章三・岡田 徹・江端 真伍・河西 敏幸・高戸 仁郎... 芳賀 博 (2010). 地域在住高齢者における自主活動への参加状況と心理社会的健康および生活機能との関連 日本公衆衛生学会誌, 57, 968-976.
- 星野 元興 (2014). 過疎地域における寺院経営——種子島・信楽寺を事例として—— 地域政策科学研究: 鹿児島大学, (11), 101-119.
- 星野 崇宏 (2009). 調査観察データの統計科学——因果推論・選択バイアス・データ融合—— 岩波書店

- 星野 崇宏・岡田 謙介 (2006). 傾向スコアを用いた共変量調整による因果効果の推定と臨床医学・疫学・薬学・公衆衛生分野での応用について 保健医療科学, 55, 230-243.
- 池内 朋子・長田 久雄 (2015). 高齢期の未来時間展望、感情調整、感情的 well-being の関連 応用老年学, 9, 113-121.
- 一般社団法人お寺の未来 (2016). おてらおやつクラブ Retrieved from <http://otera-oyatsu.club/> (2016年11月24日)
- 石井 研士 (2007). データブック現代日本人の宗教 増補改訂版 新曜社
- 金谷 信子 (2013). 日本の伝統宗教とソーシャル・キャピタル——神社活動を事例に—— 宗教と社会貢献, 3(2), 1-25.
- 金児 暁嗣 (1998). 宗教と心理的充足 濱口恵俊 (編). 世界の中の日本型システム (pp.301-329) 新曜社
- Kaneko, Y., Motohashi, Y., Sasaki, H., & Yamaji, M. (2007). Prevalence of depressive symptoms and related risk factors for depressive symptoms among elderly persons living in a rural Japanese community: A cross-sectional study. *Community Mental Health Journal*, 43, 583-590.
- 金子 善博・本橋 豊・山路 真佐子 (2006) 地域のソーシャル・キャピタルは住民の抑うつ度と関連する日本公衆衛生雑誌, 53 (10, 特別付録), 857.
- Kawachi, I., Kennedy, B. P., & Glass, R. (1999). Social capital and self-rated health: A contextual analysis. *American Journal of Public Health*, 89, 1187-1193.
- 河合 恒・猪俣 高志・大塚 理加・杉山 陽一・平野 浩彦・大淵 修一 (2016). 化粧ケアが地域在住高齢者の主観的健康感へ及ぼす影響——傾向スコア法による検証—— 日本老年医学会雑誌, 53, 123-132.
- 木村 雅文 (2003). 現代日本人と“家の宗教”——JGSS-2000/2001からのデータを中心として—— JGSSで見た日本人の意識と行動：日本版 General Social Surveys 研究論文集, (2), 145-162.
- Krause, N. (2002). Church-based social support and health in old age: Exploring variations by race. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 57B, S332-S347.
- Krause, N. (2003a). Praying for others, financial strain, and physical health status in later life. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 42, 377-391.
- Krause, N. (2003b). Religious meaning and subjective well-being in later life. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 58B, S160-S170.
- Lang, F. R., & Carstensen, L. L. (2002). Time counts: Future time perspective, goals, and social relationships. *Psychology and Aging*, 17, 125-139.
- Larson, R. (1978). Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, 33, 109-125.
- Levin, J. S. (2004). Prayer, love, and transcendence: An epidemiologic perspective. In K. W. Schaie, N. Krause, & A. Booth (Eds.), *Religious influences on health and well-being in the elderly* (pp. 69-95). New York: Harper.
- Lewin, K. (1942). Field theory and learning. N. B. Henry (Ed.), *The forty-first yearbook of the National Society for the Study of Education: Part II, The psychology of learning* (pp. 215-242). Chicago: University of Chicago Press. (Reprinted in 1997 *Resolving social conflicts & field theory in social sciences* (pp. 212-230). Washington D.C.: American Psychological Association.)
- Lewis, M. I., & Butler, R. N. (1974). Life-review therapy: Putting memories to work in individual and group psychotherapy. *Geriatrics*, 29, 165-173.
- Lowry, J. H. (1984). Life satisfaction time components among the elderly: Toward understanding the contribution of predictor variables. *Research on Aging*, 6, 417-431.
- Mahoney, F. I., & Barthel, E. W. (1965). Functional evaluation: The Barthel Index. *Maryland State Medical Journal*, 14, 61-65.
- 松島 公望 (2016). 日本人の宗教性を測る——宗教を心理学するためのガイドライン—— 松島 公望・川島 大輔・西脇 良 (編) 宗教を心理学する——データから見えてくる日本人の宗教性—— (pp. 1-19) 誠信書房
- 森岡 清美 (1970). 家との関連での社会的分析 井門 富士夫・吉田 光邦 (編) 日本人の宗教 (pp. 143-180) 淡交社
- 森田 敬史 (2015). 「臨床宗教師」研修修了者のアイデンティティ 宗教研究, 88 (別冊), 445-447.
- 本巢町 (1975). 本巢町史——通史編—— 本巢町
- 内閣府 (2012). 平成24年版高齢社会白書 Retrieved from http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/24pdf_index.html (2016年11月24日)
- 内閣府 (2015). 平成27年版高齢社会白書 Retrieved from http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/27pdf_index.html (2016年11月24日)
- 内閣府政策統括官 (2015). 平成26年度高齢者の日常生活に関する意識調査 Retrieved from <http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/sougou/zentai/index.html> (2016年11月24日)
- 中尾 将大 (2013). 一般大衆における仏教信仰の一側面——寺院参拝と社協による心理的変容—— 仏教文化, (21・22), 43-57.

- NHK 世論調査部 (1984). 日本人の宗教意識 日本放送出版協会
- 西 久美子 (2009). “宗教的なもの” にひかれる日本人——ISSP 国際比較調査 (宗教) から—— 放送研究と調査, 59(5), 66-81.
- 野村 信威・橋本 宰 (2006). 地域在住高齢者に対するグループ回想法の試み 心理学研究, 77, 32-39.
- Norton, M. C., Singh, A., Skoog, I., Corcoran, C., Tschanz, J. T., Zandi, P. P., ... Steffens, D. C. (2008). Church attendance and new episodes of major depression in a community study of older adults: The Cache County Study. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 63B, P129-P137.
- 大井 智香子 (2005). 岐阜県大野郡白川村における住民団体活動の実態調査——山間地の村落共同体における住民参加研究の一環として—— 中部学院大学・中部学院大学短期大学部紀要, (6), 161-177.
- 岡 壇 (2012). 「自殺希少地域」徳島県旧海部町における相互扶助組織の特性——旧海部町の「朋輩組」と他町の類型組織との比較から—— コミュニティ心理学研究, 15, 136-148.
- 岡林 秀樹 (2007). 高齢者のメンタルヘルスのアセスメント 下仲 順子 (編) 高齢期の心理学と臨床心理学 (pp.234-245) 培風館
- 折笠 秀樹 (2015). 傾向スコア解析入門 薬理と治療, 43, 1101-1108.
- 滋野井 一博 (2013). 寺院相談活動と臨床心理地域援助——コミュニティ心理学の視点から—— 友久 久雄 (編) 仏教とカウンセリングの理論と実践——仏の教えと心の癒し—— (pp.259-271) 自照社出版
- 島藪 進 (2015). 臨床宗教師の養成 心と社会, 46, 142-146.
- 下仲 順子・村瀬 孝雄 (1976). 加齢と性差よりみた老人の自己概念 教育心理学研究, 24, 20-30.
- 新村 出 (編) (2008). 広辞苑 第六版 岩波書店
- 白井 利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- Simons, M., Peeters, S., Janssens, M., Lataster, J., & Jacobs, N. (2016). Does age make a difference? : Age as moderator in the association between time perspective and happiness. *Journal of Happiness Studies*, doi: 10.1007/s10902-016-9806-1 Retrieved from <https://www.springerprofessional.de/journal-of-happiness-studies/5375202> (2016年11月24日)
- 曹洞宗岐阜県青年会 (2016). 曹洞宗の葬儀と供養——おくる—— 水曜社
- 曹洞宗総務庁 (2014). 2012年 (平成24) 曹洞宗檀信徒意識調査報告書 曹洞宗総務庁
- 末盛 慶 (2007). 家族生活 近藤 克則 (編) 検証「健康格差社会」——介護予防に向けた社会疫学的大規模調査—— (pp.75-81) 医学書院
- 鈴木 春菜・藤井 聡 (2008). 「地域風土」への移動途中接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究 土木学会論文集 D, 64(2), 179-189.
- 高橋 正実・井出 訓 (2004). スピリチュアリティーの意味——若・中・高齢者の3世代比較による霊性・精神性についての分析—— 老年社会科学, 26, 296-307.
- 辻本 昌弘・國吉 美也子・與久田 巖 (2007). 沖縄の講集団にみる交換の生成 社会心理学研究, 23, 162-172.
- 雲黄山大智寺 (2016). 行事・催事 Retrieved from <http://www.daichiji.com/> (2016年11月24日)
- Veenstra, G. (2000). Social capital, SES and health: An individual-level analysis. *Social Science & Medicine*, 50, 619-629.
- Windsor, T. D., Fiori, K. L., & Crisp, D. A. (2011). Personal and neighborhood resources, future time perspective, and social relations in middle and older adulthood. *The Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, 67, 423-431.
- 山口 智子 (1996). 高齢者の回想——主観的幸福感・時間的展望との関連—— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 43, 163-173.
- 読売新聞 (2005). 「宗教」読売新聞社全国世論調査 信じないでも神社や寺へ 読売新聞9月2日朝刊 東京本社版, 17.
- 読売新聞 (2008). 「宗教観」本社連続世論調査 日本人宗教心静かに息づく 読売新聞5月30日朝刊 東京本社版, 25.
- 吉井 清子 (2007). 主観的健康感と抑うつ 近藤克則 (編) 検証「健康格差社会」——介護予防に向けた社会疫学的大規模調査—— (pp.9-20) 医学書院
- 吉川 悟 (2009). 寺社における「対話」とカウンセリングに関する仮説生成研究 佛教文化研究所紀要, 48, 151-177.